

雑事記 (28)

盛丘 由樹年

医院建築探訪

建築業界では医院建築というジャンル分けがある。その具体的な例を示したい。これらはいずれも洋館形式の古い建築物であり、今では文化財的な価値もあるから、公的にも私的にも保存する努力がなされている。個人所有だったものが市町村などの自治体に移管されるなどして、公開されているものが多くなっている。

①箱根病院・旧本館

2013年2月22日(金)箱根・大平台で泊りがけの合評会(みなせ第57号)があった翌日、帰りに私は箱根病院に寄ってみた。箱根登山鉄道の風祭駅から北へ徒歩3分ほどだった。箱根というより小田原に近い。正面玄関に近いところに木造二階建てで、屋根の上三角屋根の塔がついている歴史的な建物がある。

箱根病院の歴史は、昭和11年(1936)陸軍省・

傷兵院がこの地に移転されたときから始まる。傷兵院はその数年前、廃兵院として発足したが、廃兵院の名称では、いくらなんでも悪すぎる。

「オレは廃人か? こんな体だもんな、しかたない」などと、時空を超えて患者たちの嘆きの声が私には聞こえたりする。

ともあれ、軍人のための病院だったわけだ。数年後に傷兵院は厚生省の外局になり、軍事保護院となった。この地に傷痍軍人箱根療養所が併設された。この療養所は、特に支那事変での戦傷脊損患者を収容した。脊損は自分の体を自由に動かせない障害だ。戦争になれば、前線の兵士の多くは、死ぬか、心身に疾病を負うことになる。ここに入院したのは、その中でも重傷者たちだった。脊髄を損傷したら、体(主に下半身)を動かすことができない。

戦後は軍人に限らず、一般の脊損患者を受け入れた。「箱根療養所」の名前で知られていた。平成20年に傷痍軍人の入院が終了したと記録されているが、完治して退院したわけではなかったろう。

箱根病院の主要施設が総合的な病院として近代的なビルに建て替えられたときに、とり壊しをまぬかれた

建築物の一つがこれだ。昭和11年建設の旧本館だ。今では職員用の会議などに使われているというが、たとえ使われていなくても、歴史的・文化的な建築物としての存在意義がある。



箱根病院の旧本館

この建屋の近くに奉安殿が残っているのので、付記しておこう。奉安殿とは、御真影・教育勅語謄本などを

奉安するためには学校などの敷地内に作られた、こじんまりした蔵のような施設だ。本体部分の高さは人の背丈ほどしかない。石造りのしつかりしたもので、鉄の扉には鍵がかけられている。窓もなく、中をのぞくことはできない。



箱根病院の奉安殿

奉安殿は戦前には学校などに多く作られたが、今では珍しい施設になっている。帝国主義（皇国史観？）時代の遺物だから、今では、一部の物好きな人を除き、見向きもされなくなっている。

②南湖院・第一病舎

茅ヶ崎駅から南東方面に約2キロの南湖地区なんこに有料老人ホーム「太陽の郷」がある。都会的ホテルのようなビルが建てられているから、介護施設としては規模が大きいほうだろう。ここはその昔、南湖院と呼ばれていた。その敷地の一角に旧南湖院の第一病舎があった。一般人が見学できるように開放されている。ただし、時間や曜日の制限はある。

2018年8月30日（日）9時ごろ私は茅ヶ崎駅を降り、サザン通りを歩いて海岸に向かった。対抗方向から若者たちが三々五々ぞろぞろと歩いてくるのが気になった。海岸に出ると、砂浜の一角がコンサート会場になっていた。大々的な黒いコンサート舞台が茅ヶ崎漁港を背にして、にわか作りで設置されており、これから演奏が始まるらしかった。さぞ有名なアーティストとやらが出演するのだろう。近くにロープで仕切られた区画の中に若者たちが大勢、ぎゅうぎゅうに

押し込まれていた。夏の太陽がまだ強く照りつける下にいたから、開演を待っているだけでたいへんだ。私にはとても耐えられない。先ほどの若者たちは会場に入ることができず、あきらめて帰る人たちだったのだろう。

しばらく海岸沿いを西の方向に歩くと、目的の場所にたどり着いた。10時過ぎに見学専用の門から入った（10時前には入れない）。その建屋からやや離れて、公園のような広い庭の中にそれがある。第一病舎が、周囲から取り残されたように、片隅に建っている。木造で外壁に横板が張られている。白く塗装されているが、ところどころ剥がれかかっているのは、年季を感じさせる。現在この建屋の中には入れないが、数年後に耐震対策などされて室内の見学もできるようになるという（工事をしている様子は伺えなかった）。

南湖院は1899年に結核の医療のために創設された民間の病院だった。この第一病舎が最初に建てられた医療が始められた。そして「東洋一のサナトリウム」になった。サナトリウムとは、響きのよい言葉かもしれない。結核療養所というより、すつとスマートだ。若い人たちはほとんどその言葉を知らないだろう。知らなくても、恥ではない。今では死語になりつつある。



旧南湖院・第一病舎

結核療養所は、過去の歴史の1ページになってしまった。結核の治療法が確立し、その患者が減ったから現代ではサナトリウムはなくなり、別の施設に看板を変えたりしている。しかし歴史を紐解くと、明治以降の近代において結核で亡くなった人が多いのに驚かさ

れる。著名な文化人の多くが若くして亡くなっている。

南湖院にも何人もの著名人やその家族が入院した。

1908年に国木田独歩(1871~1908)がここに入院し、ここでの体験を書き、新聞に発表したものだから、南湖院の名が一般に広く知られるようになったという。

南湖院はその後、10から20の病室のある病舎を十数に増設した。最盛期の昭和10年代には、158の病室があったという。

なお、近隣のサナトリウムとして、杏雲堂病院(平塚)、海浜院(鎌倉)、湘南サナトリウム(逗子)があったと記録されている。「湘南といえば、サザン」と答える若者はいても、「湘南といえば、サナトリウム」と答えるような人は、もういないようだ。

③ 鎌倉・安保小児科医院

2015年5月22日、私は鎌倉駅西口に出て御成通りを通り、長谷方面の道をたどった。この道沿いにはレトロな近代建築がいくつか残っており、おもしろかった。コンクリート造りの銀行や郵便局、お城のような店構えの建築(寸松堂)まである。私としては銀行の建屋に一番興味を持った。寸松堂にはびっくりさせられた。「何これ？」という建築物だ。

そのひとつに安保医院がある。医院建築の典型とさ
れている。



鎌倉・安保小児科医院

西洋風の建築で、屋根に特徴がある。でも、今日の
感覚では、それほど際立ったものではなく、古さを感
じさせないから、案内板がないと見逃してしまいそう
だった。

鎌倉市が設置したプレートの説明文によると、「旧
安保小児科医院——この建物は、大正13年ごろ、医師
の安保隆彦氏により建てられ、平成7年まで医院とし
て使用された」

④北千住・大橋眼科医院

北千住駅の西口から歩いてすぐのところ、異様な
たたずまいの建築物がある。現代的な五、六階建ての
ビルが建て並ぶ商店街にあつて、古色をおびた西洋建
築だ。背の高いビルに挟まれ、窮屈そうに、肩身が狭
そうに建っている。それなりの存在感を保ち、くすん
だ色合いながら、異彩を放っている。3階建ての外装
モルタル作りの西洋建築で、鋭い傾斜の三角屋根が特
徴的だ。それが塔のようにも見える。バルコニーが中
世の城砦のようでもある。大橋眼科医院という。

情報によると、これは古い洋館（大正6年に建てら
れた洋館の医院）を再建したもので、昭和57年に建
てられたというから、比較的新しい。主要部は鉄筋コ
ンクリート（RC）で造られているという。それ以前
の洋館を解体したときに出た廃材を多く使ったという
が、がっかりするところがある。博物館でもレプリカ
を置いている昨今だから、それなりに見物しよう。医

院を西洋風の建築にしたのは、その奇抜さで宣伝効果を狙ったものだろう。西洋建築が、医院のシンボルになつていたようだ。

2018年7月15日(日) 私は別の目的で北千住を訪れたが、偶然これを見て、写真に収めた。



北千住・大橋眼科医院

⑤ 神山復生病院・復生記念館

神山復生病院は、ハンセン病患者を収容した施設だ。こうやまらい病と言った方がわかりやすいと思うけれど、らい病があまりにも忌み嫌われた時代があり、禁忌される病気だったから、近年ハンセン病へ名称を変えられたわけだ。ハンセン病は当時人々の間で何よりも恐れられていた。絶望的な病気だった。なお、病名が変えられたことで、良くも悪くも、言葉の重み自体が軽くなった。

われわれの理解を深めるために、Microsoft総合百科事典2008から説明文を以下に引用する(抜粋)。

ハンセン病 (Hansen's Disease) ……らい菌によっておこる慢性の感染症。皮膚、粘膜、神経がおかされる。昔はらい、またはらい病、あるいはラテン語からレプラともいった。

感染してまもなく神経がおかされて皮膚の感覚がなくなるため、けがをしやすく、傷口から2次感染がおこって健康な組織に病変をきたし、骨がこわれたり吸収されたりする。その結果、手足が変形したり指先がとれたりする。

ハンセン病はかつて不治の伝染病としておそれられ、1907年(明治40)に制定され53年(昭和28)に改正された「らい予防法」によって、患者は強制的に療養所に入れられ、世間から隔離されただけでなく、身体にあらわれる症状から、差別をうけて一生を過ごすという苦しみを味わってきた。しかし、第2次世界大戦後、生活環境がよくなったのと薬の開発によって、治りうる病気になった。

予防法については、1995年(平成7)4月に、日本らい学会が見直すべきだという意見を発表し、96年4月に廃止された。それまでは、患者の90%が全国13カ所にある国立療養所と、2カ所の私立療養所で暮らしてきたが、国立療養所への入所や外出制限などの措置が廃止され、新たなハンセン病患者は一般の医療機関で治療がおこなわれるようになった。

つまり、ハンセン病患者は、以前、感染が恐れられ、法的に専門の病院に収容され(らい予防法*1で定められた)、外部と隔離された生活を強いられていたわけだ。人々の恐怖心が、患者に対して激しい差別を引き起こす。

神山復生病院は、静岡県御殿場市神山にあって、最古のハンセン病療養所の歴史をもつ。現在は一般外来の診療を行い、ホスピス病棟を備え、近代的な病院になっている。

以下、ネット上(ハンセン病制圧活動サイト)から引用する。

そのはじめは、1883(明治16)年、パリ外国宣教会のジェルマン・レジェ・テストウイド神父が伝道中、家族から見捨てられ水車小屋に暮らす一人のハンセン病患者の女性と出会ったことであつた。テストウイド神父はハンセン病患者の救済を決意し、1886(明治19)年、鮎沢村(現御殿場市新橋)に一軒家を借り、5、6名の患者を受け入れた。

その後の年表

1889年(明治22年)パリ外国宣教会によって現在の地に開設。(在院者数は14名)

1897年(明治30年)司祭館がつくられる(現記念館)。

1901年(明治34年)財団法人神山復生病院設立。

1930年(昭和5年)岩下壮一神父が第6代院長に就任、

病院改善の5カ年計画をたて、各種施設を整備する。

司祭館を事務本館として使われ始める。

2000年(平成12年)ハンセン病療養所から一般病院

として新たに発足。

2004年（平成16年）事務本館（旧司祭館）に復生記念館が開設される。

2016年（平成28年）復生記念館リニューアルオープン。

さて私は2018年9月14日（土）、車で国道246を走り、神山復生病院を訪ねた。10時の開館を念頭に置いていたが、早めについた。道なりに行くと、林の中にそれらしい西洋館が見えたので、近くに車を止めた。後で確認すると、私は裏口から入っていた。開館前の9時45分ごろだった。歩いてゆくと、それはやはり復生記念館だった。私とその近くをうろろろしている、ちょうど通りかかった中年の女性に見答められた。見学者かどうかを問うてきた。「そうです」と私が答えると、ドアの鍵をポケットから取り出し、開けてくれた。彼女は記念館の係員（学芸員か）だったようで、私ひとりのために電灯をつけ、定刻前なのに、親切に中を案内してくれた。かなり早口の言葉で、中の展示物やら見所を一通り説明してくれた。私とときどき口を挟んで変な質問したため、話を中断させてしまったので、少々申し訳なかった。

当日、私はカメラを持ってくるのを忘れてしまった

ので、次にはパンフレットにあった写真を引用する。



復生記念館（旧病院本部）

記念館となっている建屋は、院長の司祭が住居とし執務を取った木造二階建ての西洋館で、「司祭館」とよばれていたものだ。その後、病院本部の事務所として使用され、拡張や改築が加えられた。1923年（大

正12) 9月1日の関東大震災で、洋風のかわらがほとんど落ちてしまったので、屋根がトタンにふき替えられた。壁面も、異なる色の塗料で何度か塗り替えられた。しかし、記念に残すために、創建当時の構造に戻す工事が進められ、元の形状のかわらを特注して作らせ、復元したという。最初の塗料の色は、壁面を削ってみて、ミドリだったことがわかって、ミドリに塗りなおした。

入り口を中央に、左右対称の建屋だ。内部の各部屋の天井の造りは和風だが、とても高い位置にある。

私がここで見聞きして理解したいいくつかの要点を以下に記す。

- ・この施設内で患者たちが畑を作ったり作業所で小物を作ったりして、自給自足的な生活をしていた。ただし、米作りは、皮膚感覚がない患者を悪化させる危険があり、行われなかった。

- ・目の見えない患者もいたから、それなりの工夫もされていた。

- ・院内通貨が用いられた。働いたことに対価として支払われたり、物が購入できたりした。院内で一つの経済圏を作っていた。

- ・ここは周囲に塀はなく、出入り自由な空間だった。

硬く閉ざす門扉もない。しかしながら、周囲には目に萌えない高い壁があったことが想像できる。

- ・患者は偽名で呼ばれた。診断書にも偽名が記入された。別人として振舞わなくてはならなかったわけだ。
- ・テニスや自作の芝居をしたり、文芸活動をしたりと娯楽的なこともしていた。沼津の映画館の協力により、一般的な映画も上映されていた。

- ・外部との通信は可能だったが、手紙などを出すときは必ず消毒された。消毒するためのガラス製の容器(デジケーター)が残されている。消毒薬の匂いがきつかったから、手紙を受け取った側に知覚されたという。

- ・ここでは600人ほどの患者が亡くなり、敷地にほど近い共同墓地の特定区画に埋葬された。墓もこの地に用意されていた。院長らの職員の墓もそこにある。

なお、ここでは、1939年に在院者数が135名でピークとなったとある。現在、在院者数は5名に減少している。

当時の患者たちは世間の人々から見離され、神にすがることしかなかったようだ。人道に反する扱いを受けて

いたことになる。手を差し伸べてくれたのは、やはり神だった。神のような人たちだった。敷地内には祈りの場の教会がある。

ここは慈善事業として発足した病院で、細々とした寄付によって営まれていた。当時、ハンセン病院に寄付する奇特な人は少なかった。資力に乏しく、公的な支援も不十分な病院だったため、病院を維持運営するには苦労があったという。野菜は畑で作るにしても、主食の米は近隣の農家から分けてもらっていた。それでも患者にとっては、天国のようなところだったらしく、病院の敷地に沿って流れる細流（黄瀬川からの分流。これが病院の堀代わりになっていたようだ）を渡る橋を天国橋と呼んでいた。その橋が病院の玄関に続いていた。

病院のために尽くした偉人・恩人・功労者とされる人が何人かいるが、なかでも、井深八重（1897-1989）は異色だ。井深家の令嬢として成長した（両親の離婚後、叔父に引き取られた）彼女は、若くして患者として隔離入院させられた。

彼女は同志社を卒業し、長崎県立長崎高等女学校の英語教師として働き始めた1918年に、ハンセン病と診断され、この復生病院に入れられた。その病名は

本人には秘されていたから、入院したことで病名を知った。それは衝撃的だったと本人が書き残している。そして患者の立場でハンセン病の、聞きしに勝る悲惨な実態を知るところとなった。しかし、彼女は3年後

に、ハンセン病ではないと権威ある医師に診断され、晴れて退院した。彼女の場合、単なる皮膚病か何かだったことになるが、当時の医学では正確な診断が難しかったようだ。しかし彼女は病院に戻ることになる。

教師に復帰せず、看護学を学びなおし、資格を得てから、1923年に看護婦（看護師）として病院に来た。それまで復生病院には看護師がいなかったから、初代婦長になり、生涯献身的な生活を送った。「婦長」と呼ばれ、病院内ではリーダー的存在だった。彼女は人格者だったし、写真で見ると、美貌を兼ね備えていた。私はつい「結婚しなかったのか？」と係員に聞いてしまった。人脈もあり、彼女の行動によって支援の輪も広がったことだろう。死後、彼女も共同墓地内に区画された墓に埋葬された。

この話はどこかで聞いたことがあると考え、思いをめぐらせると、遠藤周作（1923～1996）の小説『わたしが捨てた・女』に行き当たった。ネットで調べるとやはりそうだった。井深八重がそのモデルとある。

私はその本を読んだのは30〜40年前になるから、詳細は覚えていないが、当時若かった私は、タイトル名が野暮^{やぼ}にしてはよくできた小説だと感動したものだ。神山復生病院は130年もの長い歴史があり、創立当時の建屋として残っているのは、この記念館と、物置小屋、米蔵だけだという。古い病棟はなく、古い礼拝堂（聖堂）も、惜しまれながらも建て替えられた。私が構内をうろろすると、庭園で、白いスカーフをかぶった年配の女性たちとすれ違った。彼女たちは病院の職員のような感じだったし、シスター（修道女）のようでもあった。ここがキリスト教系の施設であること意識させられた。

神山復生病院の正面玄関の前に、「ルルドの洞窟」に似たような構造物があった。ルルドの洞窟とは、その昔、フランスの町・ルルドに住む病気の貧しい少女が洞窟に来たところ、その中から一人の女性が現れ、「泉の水を飲みなさい」と告げた。少女が岩に触れると、泉が湧き出した。それを飲むと、病気が治った。女性は聖母マリア様だったことがわかるーという奇蹟の伝説がある。それにちなんで世界各地に、マリア像を納める洞窟的なものが造られた。病を持つすべての人の信仰の対象になっている。

*1. らい予防法：病気の根絶（患者の根絶？）を目標として制定され、政府は患者を隔離する施設を各地に作った。近年ハンセン病が治る病気になっていのに、政府はまだ患者を隔離しているとして批判が高まり、1996年4月に廃止された。

⑥ 千葉大学医科部・旧精神科病棟

2018年9月17日（祝）午前、少々早起きして私は千葉市にでかけた。快速電車を3本も乗り継いで行った。さらに普通電車を2本乗ったから、少々くたびれた。外房線の本千葉駅から、北東方向に歩いて行った。途中、石垣のある公園を通った。石段を登ると、四層構造の白亜の天守閣がそびえていたので、驚きをもって見上げた。千葉城だった。私は千葉城のことなどぜんぜん知らなかったが、なかなか立派な建築物だ。実物大の模型でもあるのだろう。中は博物館になっているようだ。

この一帯には、聖賢堂（文化会館の付属施設）や千葉県文化会館などの目を引く近代建築もあって、私としてはおもしろかった。周りには大きな本堂を持つ寺もいくつかある。



千葉城と不審者

まもなく千葉大学医学部のキャンパスに入った。構内の案内図が掲示されていたので、確かめようとしたが、目的の建屋の名はなかった。大学にとって主要な施設ではない、ということだろうか。私の持つ地図情報にもそれは示されていないかった。でも、医学部本館（これも由緒のある建築物）の裏手辺りにその建屋が



千葉大学医学部・サークル会館（旧精神科病棟）

あるのだろうと目星をつけていた。そこへ進むと、やはり、ネット情報どおりの姿の建屋があった。サークル会館だ。学生たちに部室を提供する施設になっている。これがかつて精神科病棟だった。

竣工が1927年（昭和2年）だ。2018年の今、91年が経っていることになる。当時の施設名は、官

立千葉医科大学付属病院であり、その精神科病棟だった。1949年にそれは千葉大学医学部付属病院に改名された。なお、付属病院は、隣接する地に移り新築され、大規模な施設になっている。

戦争中、千葉でも空襲があつたけれど、戦災は免れた。樹木が直射日光をさえぎっている。裏手に回ると、ツタに覆われているところがあるから、空調の負担を軽くしているようだ。写真を撮るにはジャマだけれど。官立の千葉大学だから、付属病院の精神科病棟もそれなりにしつかりと作られたようだ。外観では、中央に玄関をもち、風格あるファサードとして押し出している。柱の上部などに装飾を施しているのも、しゃべっている。

千葉県立現代産業科学館ホームページより抜粋)

現在、部室として使用されている旧精神科病棟は、破損箇所が多く保存状態はあまり良くない。しかしそのデザインには見るべき所が多い。円弧状のアーチが玄関部を特徴づける。更にその上部の2階部分には、半円アーチで構成された開口部が3つ並んで、中央部が強調される。建物の隅部及び壁面には柱型が付けられているが、その頂部

にはコリント式のオーダーを簡略化したかのような柱頭が施されている。柱頭の装飾はかなり幾何学的であり、この幾何学性は他の部分のデザインにも現れている。玄関上部の帯上部の三角形の組合せ、窓と窓との間の下部の装飾、階段の手摺子、八角形を並べた照明の中心飾り等、細部の豊かな装飾は、明らかにアルデコのものであるといえる。アルデコは1920年代後半から30年代にかけて、欧米で流行したが、その影響は驚くべき速さで我国にも現れたことがわかる。

私が見たところ、うすきたな薄汚さはあるが、損傷箇所が多いとは感じられなかった。

中に入ると、暗い廊下に靴などが乱雑に置かれているのが目に付く。ドアの窓から部屋の中をちらりとのぞくと、体育会系のサークルらしく、トロフィーなどが棚に並べられていたり、用具かごみかわからないガラクタ類が山積みされているのが見えた。暗いので、おしげ怖気づいていると、電灯がいつの間にか点いて明るくなった。人が通ると、廊下の電灯がつく仕掛けになっているのは現代的だ。防犯カメラもどこかにいつているのかもしれない。部屋の中は足の踏み場がないほど

だし、勝手に立ち入ることは遠慮した。部室の造りはわからないが、防音効果のある壁で仕切られているようだ。

玄関に近いところに階段があり、二階へ上がれるが、地下にも続いている。地下には何があるのか。

私が降りてみると、同じような部屋が並んでいた。

この建屋は三階建のような造りになっている。結局、精神科病棟らしい特徴を見出せず、歴史や患者数など、詳細情報を知ることができなかった。ここが精神病患者の収容施設として使われていたことを、体育会系の若い学生たち(医者の子たち)は知っているだろうか。

彼らは、「ぜんぜん気にしないよ。オレたちの精神構造は患者と紙一重だもんネ、なあオマエ」「おおつと、刃物を持ちちゃいけないよ」などと茶化していたりして……。

⑦横浜検疫所・旧細菌検査室

明治政府は外国船の入港が増えるのに伴って防疫体制を整えなければならなかった。外国から対応の難しかった病原菌がいつのまにか持ち込まれていた。コレラ・赤痢・マラリアなどの輸入感染症だった。

以下ネット情報を引用する。

明治12年(1879年)7月にコレラの蔓延防止のために神奈川県地方検疫局が設置され、同年9月に三浦郡長浦(現在の横須賀市長浦)に設けられた「長浦消毒所」が、横浜検疫所のはじまりです。

現在の場所(横浜市金沢区長浜)に移転したのは明治28年(1885年)、その際に名称も「長濱検疫所」とされました。

旧細菌検査室は、明治28年(1895年)に長濱検疫所の建物群のひとつとして建てられました。大正12年(1923年)の関東大震災で倒壊、その翌年再建されたものです。

また、この地で世界的細菌学者として有名な野口英世博士が明治32年(1899年)当時博士は22歳)に検疫医官補として約5か月間、検疫業務を行っており、ペスト菌患者の発見にも功績を挙げました。

永い年月を経て荒廃したこの建物は、平成9年(1997年)の大火がかりな補修によりすっかり甦りました。野口博士ゆかりの研究施設としては日本に現存する唯一のものです。



横浜検疫所・旧細菌検査室

木に隠れている奥の建屋が横浜市長浜ホール

つまり、ここで野口英世(1876～1928)は着任まもなく、横浜港に入港しようとした船舶の乗員(中国人)からペスト菌を検出した。病状からそれと疑われたのだ。そして、研究の第一人者の北里柴三郎らに野口英世は見込まれることになった。彼らが国際予防委員会への参加や留学に関しても野口英世を推薦したから、

彼は外国で学者らの知己を得て(妻も外国人)、世界的な「偉人」への道を進んでいくことになった。

その検出はニュースになり、ペスト菌の侵入を水際で防いだことから、横浜検疫所の存在価値を高めた。横浜検疫所にとって野口英世は「恩人」の一人であるらしい。

2018年9月17日午後、私は京急の能見台駅のうけんたいより歩いていった。南東に800メートルほどの横浜市金沢区長浜にある旧細菌検査室を目指した。駅を出ると、そのままの高さの横断歩道橋を渡る。階段の上り下りがないから、うれしい。住宅地を抜けて主要な道路に沿って歩く。丘陵地帯だから、ゆるやかな上り下りがある。やがて右手に塀代へいしろわりに生い茂った雑木に囲まれた施設がある。横浜検疫所だ。雑木が疎らになつているところから垣間見ると、木造校舎のようなトタンぶきの古い建屋が見えた。地図情報によると、これは資料館と言われているもので、私はやや興味深かったから、写真だけ撮った。

その先の、隣の区域が野口英世記念公園だ。おそらく、横浜検疫所の敷地を分離して公園にしたものだろう。平屋建て、平面がほぼ正方形の西洋館が見えてくる。雑草がぼうぼうに生えた窪地の中にあつた。そんな雑

草はいまどき珍しい。一般に公園の雑草など、造園業者が放っておかないから、すぐに刈り取られてしまう。

中には、いくつかの部屋に分かれ、当時の顕微鏡や検査道具がそろえられて展示されているから、一人でゆっくり見て回った。野口英世を中心に関係者や歴史の説明ボードがあり、ここには説明してくれる人はいなかったが、よくわかる。

建屋は、1895年（明治28年）に建てられたものというが、年代を感じさせないほど、きれいに修復・復元されている。見上げると、天井や屋根の構造がよくわかる。通路の床下が冷温の貯蔵庫になっているという。電気冷蔵庫のない時代だったのだ。

この場所には、それとは別に、「長浜ホール」という一回り大きい建屋がある。細菌検査室と似たような、古めかしい外観だ。検疫所の旧本館を模したものでろう。少々いかめしい門構えだから、入りにくさがある。正面の玄関からは重いドアを手で開けなければならぬ。トイレを利用したかった私などは、恐る恐るドアを開けた。しかし内部は明るく、公民館的な施設になっている。いくつかのフロアがあり、演奏会や会議室として一般市民が使用できる。内部を見学すると、基礎的な構造は現代的で、一部の壁にコンクリートが見えて

いたりする。近年に新築されたものだろう。ソファや階段の造りになどに、一昔前の西洋館らしい豪華な雰囲気を出している。野口英世に関する展示品もいくつかあるから、一見の価値がある。旧細菌検査室の管理事務所にもなっていることがわかる。

野口英世は、現行の千円札にその肖像が使われるほどの成功者だったが、彼の大きな失敗は、自分が研究していた黄熱ウイルスに感染し、病死してしまったことだろう。